

## 大人の遊びの経験と子どもへの期待に関する研究

～幼稚園児の保護者への調査から～

○清水一巳 【千葉敬愛短期大学】

キーワード：遊び 期待 模倣

### 1. はじめに

これまで生活時間や空間の変化にともない、子どもの遊びが変容しているとの指摘は多くのところでなされてきた（住田氏 2002、仙田氏 2011 など）。また、この視点は一般化しており、今の子どものスポーツや外遊びの環境について（文部科学省調査 2013）、「悪くなった」とする者が 60.8%にのぼり、「よくなった」27.3%、「変わらない」8.4%と、多くの大人が、自分の子どもの頃との比較から、遊びの環境が悪化しているという認識を持っていることがわかる。このように、生活環境の変化にともない、子どもが遊べなくなったという認識が一般化してきているといえる。

そこで、本研究では、現代の大人は「遊び」についてどのような価値観をもっているのか、その価値観はどのように形成され、期待として子どもへ向けられるのかを明らかにすることを目的とする。そして、その期待をつくり上げている遊びの経験と知識との関係について構造化していくことにつなげて行きたい。そのことは、遊びのための能力（遊ぶ力）を、大人の期待により形成された媒介物（環境の整備、モノ）により影響を受けた経験と知識による実践としてとらえ、現代に共有された遊びの意味を明らかにすることでもある。

### 2. 研究枠組

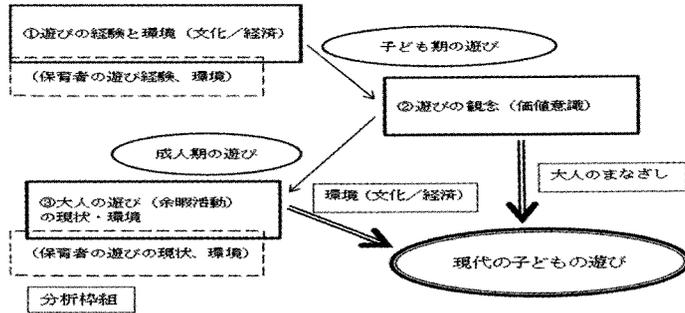
本報告では、子どもの遊び環境としての大人の存在に焦点を当て、子どもの遊びへの期待がどのように形成されているのかを明らかにする。

現代の子どもの遊びの環境について、村瀬氏（2007）は世代間の遊び環境を比較し、「子ども（友人）同士の関わりだけでは、外遊び・スポーツ遊びの幅広い実践が保障されない」との見方を示している。そして、「大人の関与による外遊びの紹介、奨励、支援が必要」であるという。しかし、子どもの遊びの環境としての大人の存在について、元森氏（2006）は、子どもの自由という視点から、そこには、「大人の不断の配慮という不自由さ」か「大人の恣意の発見」という隘路を指摘する。そして、プレーパークを事例に、『子ども』も『大人』も〈自由〉を実感し、その非対称性を強く意識しなくなる場」として大人と子どもの関係性の可能性を見出している。

つまり、現代の子どもの「遊び」は、子どもにより占有されているだけでなく、大人の影響、関わり方に大きな影響を受けていることを前提に考える必要があるといえる。そこで、現代の子どもの「遊び」を、大人の遊びの経験(①)と関連し形成された考え方、遊び観(②)のあり方により、子どもにむけられる期待と環境(③)が形成され、そこでの大人-子ども間のコミュニケーションを通して「遊び」の伝達がなされるものと捉えていく。

西村氏（2005）によると、遊ぶということは「遊びというコミュニケーション行動についてのメタ・コミュニケーションが可能」でなければならない、そこには「現実世界にあって、遊びというひとつのコミュニケーション状況に立つ『現実の遊ぶ自我』があるという。

日常生活の中で子どもは、この大人の遊びのコミュニケーション行為（二重のコミュニケーション行為）を模倣することにより、「メタ・コミュニケーション的理解」という認識行為の様式を獲得していくのではないだろうか。そのためには、社会の中で遊びのコミュニケーションが成立している必要がある。そこで、本研究では現代の大人-子ども間での遊びのコミュニケーションにおいて、大人の遊び経験と価値観がどのような影響をもっているのか明らかにしていきたい。



### 3. 調査概要

政令指定都市内にある幼稚園を通し、保護者（父親 267 名、母親 272 名）に対して質問紙を用いて調査を実施した。期間や回収率は以下の通りとなっている。

調査期間：平成 25 年 6 月 8 日から 6 月 26 日まで

回収率：回収数 265 部（回収率 49.17%）

### 4. 調査の結果と考察

#### ①属性

現在の居住地域と現在の居住形態

	現在の居住形態				合計
	二世帯（親子） 同居	三世帯（祖父 祖母・子）同居	二世帯（親子一 親子）同居	その他	
都市部居住群 人数	143	5	2	4	154
現在の居住地域の%	92.9%	3.2%	1.3%	2.6%	100.0%
現在の居住形態の%	59.3%	83.3%	50.0%	50.0%	59.5%
郊外住宅地帯 居住群 人数	97	1	2	4	104
現在の居住地域の%	93.3%	1.0%	1.9%	3.8%	100.0%
現在の居住形態の%	40.2%	16.7%	50.0%	40.2%	40.2%
その他 人数	1	0	0	0	1
現在の居住地域の%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
現在の居住形態の%	4%	0.0%	0.0%	0.0%	4%
合計 人数	241	6	4	8	259
現在の居住地域の%	93.1%	2.3%	1.5%	3.1%	100.0%
現在の居住形態の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

性別と年齢

	性別	女性	度数	年齢						合計
				25~29歳	30~34歳	35~39歳	40~44歳	45~49歳	50~54歳	
女性	度数	10	36	62	34	5	0	0	147	
	性別の%	6.8%	24.5%	42.2%	23.1%	3.4%	0.0%	0.0%	100.0%	
男性	度数	2	20	50	31	9	2	1	115	
	性別の%	1.7%	17.4%	43.5%	27.0%	7.8%	1.7%	0.9%	100.0%	
合計	度数	12	56	112	65	14	2	1	262	
	性別の%	4.6%	21.4%	42.7%	24.8%	5.3%	0.8%	0.4%	100.0%	

本報告で用いる調査対象者の特徴として、都市部居住者（59.6%）、郊外の住宅地帯居住者（40.0%）、その他（0.4%）となっており、都市部での生活経験を有する者に限定されている。また、年齢層も 20 歳代（4.6%）、30 歳代（63.9%）、40 歳代（30.4%）、50 歳代（1.2%）と、30 歳代が 6 割と、非常に限定的なものとなっている。しかし、これかの子どもを取り巻く環境に関わりをもつという意味において、この世代の遊びの経験や子どもの遊びに対する考えを分析していくことは重要な示唆を得ることができるものと考えられる。1980 年代後半から 1990 年代にかけての子ども期の生活、遊び体験を有している大人（親）である。この時期には、都市化がすすむと同時に、遊び場・時間が減少し、子どもの体力が低下していると指摘されている時代でもある。

その他の結果と考察については、発表当日に資料とともに配布いたします。